

af News

平成24年度(第21回)ブループラネット賞 表彰式典並びに祝賀パーティー

平成24年度(第21回)ブループラネット賞の表彰式典が平成24年10月31日、東京會館において開催されました。本年度の受賞者は、カナダのウィリアム・E・リース教授とスイスのマティス・ワケナゲル博士による共同受賞、ならびに米国のトーマス・E・ラブジョイ博士です。

リース教授とワケナゲル博士は、人間がどれだけ自然環境に依存しているかを表した指標であるエコロジカル・フットプリントを提唱し、過剰消費のリスクの見直しに大きく貢献しました。ラブジョイ博士は人間の活動が生物多様性を損ね、地球環境の危機に至ることを学問的に初めて明らかにするとともに、世界の環境保全に大きな影響を与えました。

表彰式典には秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、各国大使をはじめ、政官界、学界、経済界を代表する数多くのご来賓にお集まりいただきました。

式典は、地球という生命の惑星に生まれ、この星に生きる多様な命と共に生きるための一歩を踏み出して頂く一助となれば、との願いを込めた記念映像

で開幕しました。

田中鐵二理事長の主催者挨拶に引き続き、林良博選考委員長より選考経過報告ならびに各受賞者の紹介がなされ、その後、理事長より受賞者への贈賞が行われました。

秋篠宮殿下からお言葉を賜った後、野田佳彦内閣総理大臣のご祝辞が安達健祐経済産業事務次官から披露されました。受賞者の国を代表して、ジョナサン・フリード駐日カナダ大使、ウルス・ブーヘル駐日スイス大使ならびにジェシカ・ウェブスター米国大使館経済・科学担当公使がそれぞれご祝辞を述べられました。それぞれのご祝辞では、各受賞者の地球環境問題に対する熱意と業績が讃えられました。

式典に引き続いて行われた祝賀パーティーは、ご来賓の方々からの祝福で和やかな雰囲気になりました。リース教授、ワケナゲル博士とラブジョイ博士の周りにはたくさんの方々が集い、優れた業績を讃える言葉が述べられました。



ブループラネット賞表彰式典にてお言葉を述べられる秋篠宮殿下



ウィリアム・E・リース教授
マティス・ワケナゲル博士



トーマス・E・ラブジョイ博士

37億年という悠久の時を経て形作られた、 崩壊の瀬戸際に立つ今、改めて

受賞の辞 ― 抜粋 ―

ウィリアム・E・リース教授

人類だけでなく、地球上のすべての生物の歴史において、今ほど重大な局面はありません。私達は、人間活動の影響が地球の姿を地質学的に変えてしまうほど大きくなってしまった、人類紀(Anthropocene)という時代に突入したのです。

エコロジカル・フットプリント(EF)を分析することで、人類が必要とする自然資源の需要量と、それに対して生態系が提供できる財やサービスの量を比較することができます。これにより、EFは多くの国々や人間社会の活動が全体として持続可能な状態から乖離した状態にあることを初めて示す指標のひとつとなったのです。すなわちEFは、地球の収容力がどのくらいあるのかということをも改めて考えさせる重要な役割を果たしています。旭硝子財団がブループラネット賞の授賞を通じて我々の研究モデルを認めてくださったことに対して、ワケナゲル博士と私は大変誇りに存じます。

一方で、ラブジョイ博士による生物多様性喪失に関する論文は、人間のフットプリントが他の種の生態系に広がって究極的に生物の種を減らし、種の絶滅を早めることを示しており、我々が取り組んできた研究を強力に補完しています。

ほんの100年か200年前には王侯貴族だけが可能であったような物質的な豊かさを、今では何十億人が享受しています。しかし同じくらいの人達が痛ましい貧困から抜け出せないでいます。これまで政治的に可能な貧困の唯一の解決方法は、消費型経済の拡大でした。例えば、「私たちが望む未来(The Future We Want) (リオ+20会議最終報告書)では、基本的に持続可能な開発を「経済の持続的成長」と同義に位置づけています。

当然のこととして、EFの分析結果は消費拡大を伴うような持続可能性戦略に対して、大いなる疑問を投げかけます。その代りとして、人々が自然の恩恵の範囲内で公平に暮らすような「定常状態」の経済を選択すべきことは間違いありません。私達は、ヒトという責任ある生物の一員として、地球上のあらゆる生命が織りなす網の中に調和し、統合されるような新しいグローバル文化の筋書きを作らなければなりません。ブループラネット賞は、この目標を達成する上で最も大切な人々の関心を世界的に喚起するとともに、この活動を進めた私達に栄誉を与えて下さいました。私達は深く勇気づけられております。

マティス・ワケナゲル博士



私達は、この偉大な青い惑星のもとで誰もが豊かに暮らしていける夢を胸に、グローバル・フットプリント・ネットワークとして一致協力した活動を進めてきました。

夢は、それを共有する友や家族がいなければ、投資したとしても幻にしかすぎません。私達は、同じ理想を抱く何千人という人々から成る素晴らしいコミュニティの一部であり、それらの人々が夢を広め、抽象的な概念を実行に移すためのツールやプロジェクトを生み出しているのです。私は、現在の経済の仕組みを地球のためのものに転換することが可能だと深く信じるようになりました。経済が使い捨てを前提とする限り、つまりハリウッドが言うところのターミネーターならば、我々にとって役立つたないのです。この地球が供給できる以上のものを、いつまでも受け取るなど不可能です。

秋篠宮同妃両殿下をはじめとするご列席の方々からは並々なぬ励ましをいただき、これまでとは異なる世界を生み出すことが可能だという私の信念は強まりました。そして、私達がこの新たな道を切り拓けると考えています。ですから、私はこのたびの栄誉を強い責任感をもってお受けいたします。人類の資源欲が増大し、世界的な行き過ぎをもたらしたのは明らかですが、一方でこの世界にはあまりにも多くの人々がまともな生活を送ることができないのは見るに堪えないことです。我々は、このような信じられない課題に二重に直面しているのです。そして、未来を持続可能な道筋へと方向転換する上で、過去の取り組みが効果的だったという証拠はほとんどありません。

旭硝子財団が掲げる事業目的やブループラネット賞は崇高で、こうした難題に取り組む我々に勇気を与えて下さいます。心より感謝申し上げます。また、歴代のそして将来の輝ける受賞者や受賞組織、それに比肩すべき多くの個人や組織に加わり、力になる機会を得て感動しております。グローバル・フットプリント・ネットワークの献身的な関係者や世界中に広がるそのパートナー組織、多くの重要な資金提供者、支援者、教師、陰の助力者、そして最も根源的で、それゆえ絶対的に必要な夢、つまり偉大なるブループラネットの上で誰もが生命を謳歌することが出来るという夢のために献身的に尽力しているその他すべての人々から成る広範なコミュニティの一員であるのは、素晴らしいことであると感じています。

人類を含む地球の生態系が 持続可能な生き方が問われています。



トーマス・E・ラブジョイ博士



このたび2012年度ブループラネット賞を受賞することは、私にとって大変な名誉であり、身が引き締まる思いです。今までご助言や激励を下された方々や仕事を通じて私の業績にかかわってこられたすべての関係者を代表して、このたび受賞させていただきます。

また、ブループラネット賞が顕彰対象としている環境問題解決の重要性についても、この生きている星の代表として深く賛同いたします。地球における37億年という生命の歴史は、まさに驚くべき途方もないものです。それは、生命体の絶え間ない進化や増殖のみならず、生命そのものがこの星を変容してきたことからも言えることです。ヒトが複雑な社会や知識体系を伴う社会的動物として進化することを可能としたのも、生命の歴史なのです。ヒトが得た知識として最も重要なことは、

地球が複雑に繋がった生物学的かつ物理的システムとして実際に機能していることを理解できるようになった、ということでしょう。

我々は、将来の世代や地球上の人類以外の生命のために正しくシステムを運営することもできれば、一方で誤った方向に進み、規律を欠いた失敗と地球の環境収容力低下、という負の連鎖に陥ることもあり得るのです。それは我々の歴史における究極の課題であり、将来の人類世代や地球における他の生命のために、最高の科学的調査と最高の人間的な価値表現というふたつが求められる課題でもあります。

少し気が引ける言い方ですが、バッハのソナタやシェイクスピアの演劇、北斎の木版画、数々の技術的偉業を生み出すことができるヒトが、環境悪化の加速という現在の潮流を克服できないのは信じ難いことです。結局のところ、この生きている惑星と地球における生命の神秘を尊重する道筋のもとに自分たちを管理することは、とりもなおさず我々自身の利益につながるということです。すべての生き物は、お互いに関わり合っているのであり、37億年という家系を共有する存在なのです。

社会が直面する問題は、地球上のどれだけの多様な生物と我々が将来を分かち合うのかということです。つまり、それが我々の人間性を計る指標なのです。

贈賞理由紹介



林 良博
選考委員長

ウィリアム・E・リース教授と マティス・ワケナゲル博士

両博士は、これまで人間がどれだけ自然環境に依存しているかを表した指標であるエコロジカル・フットプリントを提唱し、過剰消費のリスクを明らかにされました。

エコロジカル・フットプリントの概念を用いると、人類の消費が再生可能な自然資源の1倍以下であることをサステナビリティの定義とすることが出来ます。両博士が各国はもとより世界全体について自然資源とその消費量を計算した結果、現在、自然資源をおよそ1.6倍も過剰消費する状態にあることを示しました。

すなわち人類は、サステナビリティからかけ離れた営みを続けていることが明らかにされました。

このように、両博士は過剰消費(サステナビリティ・ギャップ)をはっきりと示す、詳細な収支計算に裏付けられた豊富なデータを世に示し、人類の過剰消費のリスクの見直しに大きく貢献されました。

トーマス・E・ラブジョイ博士

ラブジョイ博士は生物多様性の概念が未だ生まれなかった1960年代にアマゾンの熱帯雨林で画期的且つ大規模な実地調査を独自の方法で実施し、そこで得られた大きな成果によって種の減少という事実とその主なメカニズムを明らかにされました。

博士はこの実地調査により、人間の行動がどのようにに生息地の分断を引き起こし、互いに依存し合う生態系を危機的な状況に追い込んだかを初めて学術的に解明されました。一連の研究から得た生態系に関する深い見識に基づき、世界最初となる「種の絶滅予測」を発表し、生物多様性の概念の礎を築かれました。

以来一貫して絶滅危惧種の増加に警鐘を鳴らし、多数の学術機関や学会に大きな影響を与えるとともに、今や主流となった生物多様性の概念に基づく自然環境の保護に向け、その基盤作りに貢献されています。

ブループラネット賞 受賞者記念講演会

受賞者の記念講演会が11月1日、国際連合大学・タント国際会議場において、230名を超える方々が参加して開催されました。第1部ではリース教授が「環境収容力、グローバリゼーション、そして持続不可能な国家間のエンタングルメント(もつれ合い)」の演題で、ワケナゲル博士が「前提の再構築：グローバルオークション時代への突入」の演題で講演した後、京都大学大学院地球環境学堂の松下和夫教授のコーディネート



松下教授



中静教授

による質疑応答が行われました。第2部ではラブジョイ博士が「気候変動に対する大胆な解決法」の演題で講演

した後、東北大学生命科学研究科の中静透教授のコーディネートによる質疑応答が行われました。会場の参加者から多くの質問が寄せられ、中身の濃い活発な質疑応答が展開されました。

当日の配布資料および講演の様子は、当財団ホームページからご覧いただけます。

プロフィール映像より

リース教授とワケナゲル博士



リース教授(右)祖父の農園で自分が自然と大地に深く関わっていることに感動



1973年
トロント大学で生態学の博士号取得



ワケナゲル博士10代の頃から資源には限界があると考えていた



1987年
ブリティッシュ・コロンビア大学に留学



リース教授の指導の下、ワケナゲル博士は膨大なデータを分析



リース教授 1992年
机上のパソコンからフットプリントという言葉を思いつく



ワケナゲル博士 1994年
資源会計の枠組みとしてのフットプリント分析を完成、2年後にリース教授と共著を出版



フットプリント分析が多くの国で会計制度の柱となることを目指し日々邁進している

トーマス・E・ラブジョイ博士



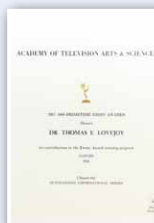
ミルブルック・スクールへ入学、動物園を創設したフランク・トレバー教師の指導を受け、生き物に深い興味を抱く



エール大学へ入学、2年に亘り熱帯雨林の鳥や木の研究に没頭



1980年
「生物学的多様性」という言葉を生み出すと共に、世界で初めて「種の絶滅予測」を発表



ドキュメンタリー番組「Nature」の創設に寄与し、また議会証言や講演活動を通して、生物多様性の保全を広く社会に訴えている



現在はジョージ・メイソン大学の科学・政策教授として後進の指導にあたっている

第21回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」 調査結果記者発表

韓国・済州島で開催された IUCN WORLD CONSERVATION CONGRESS にて、9月10日に田中理事長、森島昭夫理事、鮫島専務理事、安田事務局長が出席し、第21回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」調査結果の記者発表を行いました。



記者発表



質疑応答で回答する森島理事
左はラブリョイ博士

田中理事長による開会の挨拶、安田事務局長による調査結果の説明に続いて、森島理事から第21回を迎える本アンケートについての解説が行われました。調査結果の詳細は当財団ホームページに掲載しておりますので、ぜひご参照ください。

記者発表後には会場を別に移し、質疑応答が行われました。本年度ブループラネット賞受賞者のトーマス・E・ラブリョイ博士を含む参加者の方々から質問が寄せられ、森島理事との間で活発なやりとりがなされました。

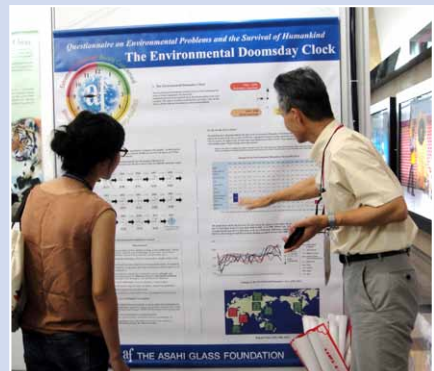


ブース出展

開催期間中には「環境危機時計®」についてのポスター発表を行い、世界各国からの来場者と地球環境アンケートについて質疑を交しました。

また、一般の方々も入場できる会場に旭硝子財団のブースを出展し、地球環境アンケートを含む財団の活動を多くの方々で紹介しました。

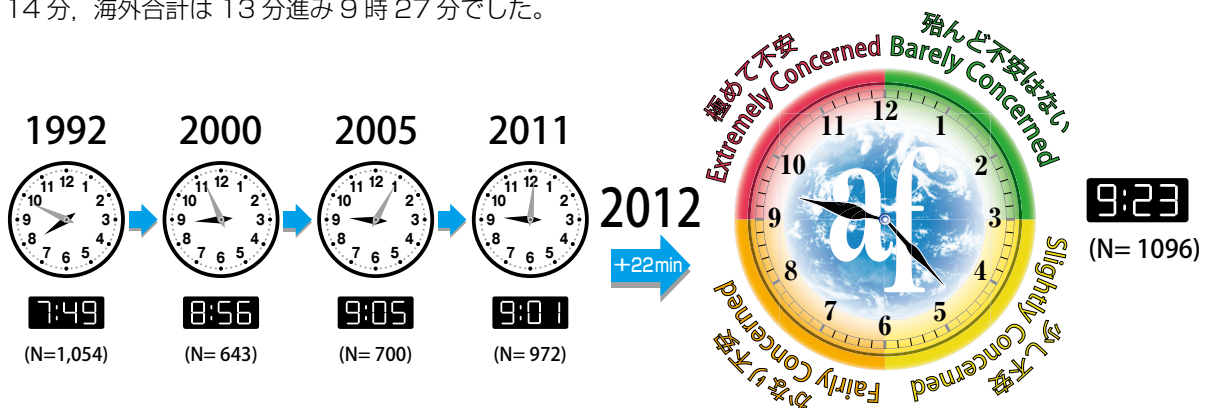
子供向けに「環境危機時計®」についてわかりやすく説明したハローキティの環境危機時計®ポスターや関連グッズを訪れた子供たちに配布し、好評でした。



ポスター発表する安田事務局長

❖ 人類存続の危機に対する認識「環境危機時計®」❖

2012年の全回答者平均の環境危機時刻は9時23分となり、昨年より22分進み、2009年以降3年連続で後退していた針が、2009年のレベルに戻る結果となりました。日本は前年に比べて針が28分進み9時14分、海外合計は13分進み9時27分でした。



ポスターを差し上げます

環境危機時計® × ハローキティー



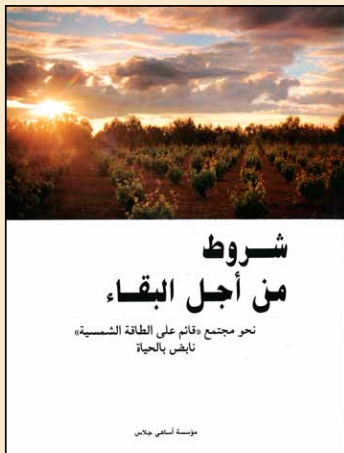
環境のこと、未来のこと、 ハローキティと一緒に考えよう。

環境アンケート調査 20 周年を記念して、人類存続の危機意識を時計の針で表した「環境危機時計®」の児童用ポスターを制作しました。

小学校や児童関連施設等に広く掲示して頂き、環境活動へのささやかな貢献をさせて頂きたいと願っております。

ポスターを掲示いただける方、ご希望の方へお送りいたします。同送の FAX 専用申込書にご記入の上ご送信いただくか、当財団HP (<http://www.af-info.or.jp>) のお申込みフォームからご応募ください。

『生存の条件』 アラビア語版刊行



- ◆ 出版社
UNESCO Publication Centre
- ◆ 監修
Dr. SAMIR I. GHABBOUR
カイロ大学名誉教授

旭硝子財団では2010年に『生存の条件』の日本語版・英語版を刊行しました。この本は世界各国で好評を博し、海外の協力者によりさまざまな言語への翻訳が進められ、2011年の中国語(簡体字)版、韓国語版に続き、2012年にはアラビア語版が刊行されました。

今後、フランス語版の刊行も予定しています。

日経ウイークリー 広告賞受賞



賞状を受け取る田中理事長

旭硝子財団の広告が第32回日経ウイークリー広告賞を受賞しました。

12月7日に日経ホールで開催された第61回日経広告賞贈賞式には、田中理事長が出席し賞状を受け取りました。



日経ウイークリー特別号掲載広告

公益財団法人 旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2階
TEL (03) 5275-0620 FAX (03) 5275-0871

URL <http://www.af-info.or.jp>
E-MAIL post@af-info.or.jp